

小田実全集（評論 第2巻）

壁を破る

世界のなかの体験と思想



講談社

小田実全集

Makoto Oda

サンプル版

目次

I アメリカのつくったもう一つの日本

わがフルブライトの仲間たち (i)

——日本の縮図——

わがフルブライトの仲間たち (ii)

——「まっすぐなアメリカ」と「斜めのアメリカ」——

わがフルブライトの仲間たち (iii)

——「格子細工」のなかで——

わがフルブライトの仲間たち (iv)

——いつ、どこで、いかにして——

わがフルブライトの仲間たち (v)

——アメリカのつくったもう一つの日本——

二つの「まぢか」

二〇世紀のひとつの顔

142 139

113

87

63

38

10

II それを避けて通ることはできない

それを避けて通ることはできない

——韓国・その現実と未来——

新しい視点

——韓国での一つの感想——

板門店・北から南から

第三の立場の上に立つて

甘美な逃げ口上

日本の立場に立つということ

——「アジア・アフリカ」問題についての短い感想——

III 日本が世界に語る

「相互理解」と「相互誤解」

もやのかかった日本

——「トウキョウ」特派員の見る眼——

日本が世界に語る

——「ジャパン・スピークス」の提唱——

258

242 228

223 220 217 211

196

160

外へひらく小説

あとがき

壁を破る

I
アメリカのつくったもう一つの日本

わがフルブライトの仲間たち(i)

—日本の縮図—

1 見る⇐見られる

私は、最近、安岡章太郎氏の『アメリカ感情旅行』（1962年 岩波書店）という書物を読んだ。

なかなか面白い本であった。いろいろなところで私はひつかかり、そのひつかかるところが面白いのだった。ことに、それが私にさまざまなことを思い出させ、またさまざまなことを考えさせてくれた点で。

本を開くとすぐ、私はひつかかった。いや、ひつかかったというほどのこともない。私はつまらぬことを思い出したのである。「はしがき」のところである。安岡氏は書いている。「『何でも見よう』は小田実氏の旅行記であるが、じつは私は最初、それにちなんでこの本の題名を『何でも見られてやろう』としようかと考えた。これまでの私がそうだったように、この旅行中も私は受け身のかわりか物を見なかった。私は見ていると同時に、自分が見られているという意識から、ほとんど片時もはなれられなかったようである。路上で、ホテルのロビーで、学校の教室で、知人の家の居間で、私はいつも歯医者椅子か病院の待合室にいるような気分だった」

安岡氏の文章を読んだとき、アメリカで最初に医者にみてもらったときの記憶が、昨日のこのようによみがえって来た。外国で医者にかかったのは、残念ながら歯医者経験はなかったが、四、五

回あった。

アメリカでの最初のお医者者の体験は、まったく、たわいのないことからであった。身体検査に出かけさせられたのである。私は、あとでくわしく述べるように、アメリカ政府がお金をくれるフルブライト留学生としてアメリカに行き、ハーバード大学の学生となったのだが（ただし、私のアメリカ人の友人たちはよく言った、「おまえはいつでも二セ学生みたいなのところがあるな」）、ゆらい、学生という身分には身体検査がつきものものらしい、お医者と対面することになり、呼ばれて診察室へ入って行ったら、いきなり、まるはだかにされてしまった。まるはだかにする必要もたしかにあったのだが、その必要がすんだあとでも、そのアメリカ一の紳士大学ハーバードのお医者には、私にパンツなどはく余裕をあたえないで、胸に聴診器を押しあてたり、口をアーンと開けさせたり、次いでやつぎばやに、かくかくしかじかの病気をすることがあるかとかないかとか、ゴチャゴチャと訊く。私に病気の名前などというややこしい英語が判ろうはずがない。私の知っているその種類の単語は、結核か肺炎か、さもないければ精神分裂病、もしくは梅毒くらいなものではないか。メンドくさくなって、私は英語ではそういう病気しか知らないと答えた。判ったのか判らなかつたのか、お医者はずれた顔をし、「つまり、おまえはずつと健康であるということだな」

バカげた記憶である。安岡氏の「はしがぎ」の文章が、長いあいだ忘れていたその記憶をよみがえらせてくれたのだが、『アメリカ感情旅行』を読み終ったとき、私はふと思った。安岡氏がもし私のようにまるはだかにされていたら、どうしただろう。どんなふうに、その日の日記を書いただろうかと、私はハーバードでお医者になるはだかにされるまで、アメリカ人の友人宅にころがり込んだり、寄

宿舍生活を短時日であれすでに始めてもいたから、アメリカ人の男性が、同性間ではまるはだかで平気であるということを知っていた。それで、お医者には、なにも特別に私だけをまるはだかで長時間放置したのではない、ということが判っていたのだが、それにしても、あまりいい気持はしなかった。

お医者はずつに私を見ていたわけではなかったのにちがいない。私のほうから言えば、私はべつにお医者によつて見られていたわけではなかった。ハーバードにはワンサと日本人学生がいたから、お医者によつて、日本人のまるはだかなど、そうそう意識して見るほどのものでもなかっただろう。彼の視線は、たしかにそんなふうなそつけないものであり、実験動物を見るという眼ではなかった。見られたと、そのときもし私が感じたとしたら、そしてたしかに心の片隅で私はそう感じたのだが、それは見られたという意識を能動的にもつたということにほかならないだろう。

たぶん、安岡氏は、そうした意識をことのほかに能動的に、積極的にもつ人なのだと思う。「受け身のかたちで」ものを見るということは、逆に言うと、へんな言い方だが、能動的、積極的のものに見られるということなのかも知れない。そこから傷ましいまでの気がね、不安、恐怖、あるいはそれらが陰にこもつての底意地の悪さが生まれて来て、それらが日本人が西洋人に対してもつている、あるいはもつていると想像されている劣等感と結びつく。いや、逆に、すべては劣等感から発しているのだろうか。

おそらく、私は、生来、きわめて鈍感なのであろう。あるいは、私は安岡氏と逆のタイプの人間であるのかも知れない。お医者のみえでまるはだかであったとき、たしかに私は見られたという意識をもつたが、その意識の程度は、安岡氏に比べてはるかに低かったのにちがいない。ぶあついオーバーコー

トで身を包んだ安岡氏を行きずりの人が見る、そのときに氏が感じたものに比してさえ、それはそうだったのだろう。その上、私は急速に慣れはじめていた、男が室内でまるはだかであるという社会に。

安岡氏が元来「受け身のかたちで」ものを見るたちの人とするなら、私は能動的、積極的にもものを見る男なのだろう。逆に言う、能動的、積極的に見られる（ことを意識する）のが不得手であったということにもなる。生まれて初めて外国の土地を踏んだとき、私にあつても、この「見る」見られる」の関係は、しばらく後者が優勢だったかも知れない。しかし、私は急速に、想像していたよりもはるかに急速なスピードで、見られる私から、本来の見る私に復帰することを始めた。

そして、私の見られるという意識には、安岡氏ほどの劣等感とは、こびりついていなかっただろう。劣等感があつたとかなかつたとか、私はそんなことを、ここで問題にしようというのではない。誰だつて、見知らぬ社会へ行つてヘマをすれば、ヘマをしまいかという危惧の念を抱けば、劣等感をもつにちがいない。ただ、程度問題なのだ。私の場合で言えば、私の劣等感とは、見られる私から見られる復帰することを妨げるほどのものではなかつたと言えよう。あるいはこう言つてもよい。量も多くなれば、質的变化をきたすのだろうか、その点で私のそれは、それほどの量のものではなかつた、つまり、劣等感を感じたとしても、私はそれにこだわってはいなかつたし（むしろ、ある場合には、劣等感をもつのがあたりまえのことと思つていた）、またこだわる必要を自分の心のなかに認めていなかったのだ。

私が見られているとしたら、そしてそれは実際そうなのだったが、平面的に、同じ平面上で見られていた（そんなふうに意識していた）のだろう。安岡氏の場合、見るものは、つねに、彼という見ら

れるものの頭上高くにあった(と、彼は感じた)。実際、私は見られることを利用して、積極的に、知人・友人をつくった。ヨーロッパでも同じだった。そうでもしなければ、私はあんなチツポケな財布で、のほほんと世界旅行をすることはできなかったにちがいない。もし私が安岡氏のように外国人の他人の家で泊めてもらうことに、あれほどの不安と気がねを感じていたとしたら——私は強度の強迫観念のとりことなつて、今ごろアテネかどこかの精神病院で日を暮していることだろう。

価値観のズレが、安岡氏と私のあいだには、明らかにあつた。たとえば安岡氏にとつて、アメリカ人の家に泊めてもらつて、『シヨウ』だの『ミチュ』だのと呼ばれることは、慣れれば何でもないとだろうし、はやく慣れてしまふべきかもしれないが、一方ではそんなことになつてしまつては大変だという気もする。何が大変なのかは自分でもよくわからないが、とにかく困ることは困る」のだが、私にとつてはそうではない。そう呼ばれることに慣れたところでそれはそれだけのことであり、私にとつて本質的なことではないし、と言つて、逆に、私はそれをべつに「はやく慣れてしまふべき」とだとも思つていなかったのである。

いや、私だつて、「シヨウ」とか「ミチュ」とか舌足らずなことばで呼ばれるにはウンザリする。どうして安岡氏は日本の習慣を説明して、日本人は親しい友人間でも名前を呼び合う習慣はないのだと、あたりまえのことを言わなかつたのだろう。私自身は友人にそんなふうに言い、彼らは私を私の姓で呼んだ。もつとも、この原則には、女の子の友人は例外をかたちづくつていたが。

安岡氏の本を読んで、私の感じたことの第一は、「あたりまえ」の欠如であつた。どうして、あんなにも、彼は無理をしなくてはならないのか。無理をしてまで、パーティといういやなものに出なく

ではならなかったのか（私にとつて、またあとから述べる私の仲間にとつて、パーティはむしろ楽しいものであった。すくなくとも、当時の私と友人の会話の表現を借りれば、「一食もうかるやないか」私は、私と友人をパーティに招かせるための厚かましい手紙まで知人に書いたことがある）。安岡氏ばかりではない。最近出た伊藤整氏の旅行記にも、私はそれを感じた。たとえば、どうして、伊藤氏は、あんなに苦心してまで冗談を言わなければならなかったのか。その著『ヨーロッパの旅とアメリカの生活』（1961年 新潮社）には、彼がその日言つた冗談が、毎日毎日の日記のかたちで克明に集録されているのだが、氏は、日本でもそんなふう日々の何でもない冗談まで、日記に書きとめていられるのだろうか。私には『ヨーロッパの旅とアメリカの生活』の冗談は、すべて重苦しい墓碑銘のように見えた。

2 「小日本」

何が安岡氏に、また伊藤氏に、そうした無理をさせるのだろうか。日本人としての使命感なのだろうか。たしかに人は外国へ出かけるとき、愛国者になるが、日本人という立場、あるいはその意識は、たとえば安岡氏個人のそれに優先するのだろうか。そんなふうに氏は感じていたのだろうか。そして、それが、出たくもないパーティに安岡氏をかりたてて、話したくもない人と話させますれば、言いたくもない冗談を言わせましたのだろうか。

安岡氏の本を読んでいるうちに、私はあるパーティのことを思い出した。そこに日本人の大学の先生がいて、彼はしきりに肥つたアメリカのオバチャンに何ごとかを論じたてていたのだが、そのオ

バチャンが彼のことを何一つ判っていないことはたしかだった。それにもかかわらず、大学教授は、たぶん自分の専門に近いことだったろう、論じたてる。もつとも、そうは言つても、彼が何も好きこのんでこんな無智なオバチャン相手に論じているのではないということは、彼の表情からよみとれるのであつた。そして、私がそばにぼんやり立っていたら、彼はヒョイとふり向いて言つた。「どうせこういう連中に言つたつて判りつこないんだがね。くたびれるだけだよ」彼のシニシズムを、私は、そのとき、ほとんど憎んだ。

しかし、私が憤慨するまえに、彼は、自分の専門に近いことを長々と論じたてたことによつて、パーティのエチケットを知らざる者として、おそらく安岡氏と対照的な立場にたつ人たちから弾劾されることだろう。『アメリカン・ライフ』（1961年 岩波書店）の著者小宮隆太郎氏は、たぶん、その弾劾者の一人ではあるまいか。氏は、パーティのエチケットを説いて、たとえばこう述べている。「アメリカにきたばかりの日本人のなかには、アメリカ人のかなり大きなパーティーに招かれたとき、パーティーの中にほかにも日本人がいると、地獄で仏に会つたような顔をして遠くから人をかきわけて近寄つてきて、はなはだしい場合には、あたりかまわず日本語で話しかけてくる人が少なくありませんが、これにはほとほと閉口いたします」

こここのくだりを読んだとき、私の感じたことは、こういうエチケットを学ぶためにわざわざアメリカくんだりまで出かけて行きたくないということであつた。大きなパーティーでたまたま同国人の姿を見かけたら、人をかきわけてまでそこへ行くのが、国籍をとわず、むしろ、あたりまえのことではなにか。ことに外国へ来たてで、西も東も判らぬ場合。そして、そういう人がそばに来たら、母国語で

話しかけることも、これもあたりまえのことであろう。東京で日本人がパーティを開く場合、たまたまアメリカ人が二人出席したら、その二人はおたがいに近づいて、たとえ日本語がいくらかできて、英語でやはり話すだろう。私は、二、三度、そうした光景を目撃したが、それでもつて、失礼な奴だと憤慨したことも一度もなければ、それが「はなほだしい場合」であるとも夢にも思わなかったのだ。しかし、考えてみると、ことは簡単かも知れない。小宮氏には奥さんがいて家庭があり、そこでは日本語で話されていただろうから、パーティへ出てまで日本人と会ったり、日本語で話す必要はなかったことだろう。だが、今、逆の場合を想定してみたら。パーティが、日本人と会い、日本語を話す唯一の機会だとしたら。

外見上の差異にもかかわらず、私には、小宮氏と安岡氏は本質的にはよく似ているように見える。どちらも家庭をもち、いわば、それを日本の出店とされていたこと。象徴的に言うと、小宮氏と安岡氏は、「アメリカ」での一日の仕事を終えて帰つて来ると、そこに「小日本」が待つていたというわけなのだが、そのとき、小宮氏のほうは微笑を浮かべながら帰り、安岡氏は安岡氏で苦虫を噛みつぶしたような顔で御帰館になったのかも知れない。ときには、この「小日本」も連れだつて、パーティという「アメリカ」に出かける。そのとき、小宮氏は樂しげにそうし、安岡氏は内心ではクソクラエ！と思つていたのである。両者に共通するものは義務感である。息苦しいまでのそれである。

思うに、小宮氏はまっすぐに育つたまともな人であつて、日本でもパーティに出るたちの人であり、安岡氏は小宮氏とは逆に、日本でならこんなパーティになぞ出るものか、と内心ひそかに決心していたのにちがいない。けれども、二人の立場をいま逆転してみても、小宮氏が安岡氏のような性向の人間

だったとしても、やはり、小宮氏はパーティに出たであろう。おそらく、現実の安岡氏がそうであったように、不機嫌に微笑しながら。私は、彼の『アメリカン・ライフ』に述べられている言説からおして、小宮氏もまた、安岡氏と同様、同程度の義務感の持主だと判断するのである。

義務感から来るものは、「演技」であろう。阿川弘之氏は「ホノルルまで」（『世界の旅』第一巻・1961年 中央公論社）という文章のなかで、そのことを率直に書いている。アメリカ船に乗つて、いよいよ横浜を離れたとき、エレベーターのなかで、はじめて夫人と二人きりになる。『あああ、何だかまるで、演技をしているようだ』と大きな声で日本語で言った。『演技でも、いい気分がする』と妻は笑った。『……日本の女も、ちょっと日本を離れると、雌鳥が威張る悪習を身につけるらしい。どうか勘ちがいしないように頼んまッせ』と言ひ、通路を通り、一八一号という自分たちの船室に帰ると、ドアを閉めて、『とにかく、ここからこつちは、アメリカ合衆国の主権が及ばないことにするからね』と言つた」

なんとも傷ましい主権宣言で、沖繩の日本の主権と好一对だと思ふのだが、このアメリカ船の「小日本」こそは、彼にとつてリアルなものであり、「小日本」の外の「アメリカ」は「演技」をなすためのフィクシアスな場ということになるのだろう。そして、ときどき、彼の「演技」は破綻する。あるいはそこまでいかずとも、彼は疲れはてて「小日本」に戻つて来る。ホノルル到着の前夜の「アロハ・デイナー」と呼ぶお祝いの晩餐の席で、紙製のバカげた三角帽子をかぶるかかぶらないかで、彼は同じテーブルの女の子と子供じみたケンカをするのであるが、その場合も、彼は自分の部屋、つまり「小日本」に急遽はせ帰る。

小宮氏なら、同じように三角帽子をかぶるのがばからしいと思っても、阿川氏ほど、心に抵抗をおぼえることはないだろう。これも「アメリカン・ライフ」だ。アメリカを知るために、私はかぶらなくてはいらない、とそんなふうにもうかもしれない。彼は『アメリカン・ライフ』の「はしがき」で書いている。「アメリカにいる日本人たちのほとんどがアメリカ人とあまり交際せず、日本人同士ばかりで交際して、アメリカ文明について全く見当違いな批評ばかりしている」というドナルド・キーン氏の批判をもつともなことで、**「私たち夫婦は、そういう安易な留学生活に陥らないように」と**思つて、アメリカ人とできるだけ交際し、なるべく日本人留学生達とつき合わないことにして、アメリカ人の生活のまねごとをいろいろとやってみました」

小宮氏のこうした義務感、アメリカを知るためには、「できるだけ」アメリカ人的にならなければならぬ、という義務感、ひよつとすると阿川氏の「小日本」確立と本質的に同じことではないか。たとえば、そのどちらもが、無理をしているという、単純で、たぶん重大な点において。そしてその義務感、日本人としての義務感、使命感にするすると結びつく。

しかし、いつたい、アメリカとは何なのだ。

3 「日本人になる」

外国へ出かけるということは、それは「日本人になる」ということだと、私は思う。外国に出ないまえ、私たちはたんに「日本人である」のにすぎないのだろう。異国の社会のなかで、私たちは初めて、日本人としての意識を明確にもつ。

と云うことは、どういうことか。「日本」というものぜんたいに對して、責任をもつ、あるいはそんなふうを意識することではないか。日本でなら、たとえば小宮氏は経済学の大学教授であつて、日本の文学についてはべつに責任をもつていないだろう。安岡氏は作家であつて、日本の経済学について、あるいは大学について、べつに考へてみる必要はないだろう。進歩的知識人は、右翼のテロリストをたんに敵意と輕侮の眼で見ることが出来る。岸信介氏を簡單に見離すことができる。しかし、一步、日本の外へ出た場合はどうか。これは私自身の経験だが、日本でならあきらかにもと私の外にいたはずの岸信介氏が、ほかならぬ自分の体内に居るといふ、やつかいなことになる。

これはアメリカ人の場合だつて同じことかも知れない。アイゼンハワーはバカであるといふアメリカ人がいて、そうだ、そうだ、といつしよになつて論じ合つて居るうちに、相手がだんだん不機嫌になつて行つたことがある。アメリカ帝國主義についても同じである。もし私がアメリカ人で、アメリカに居るなら、私は、自國の帝國主義をクソミソに即座にやつつけるだろう。しかし、アメリカの外では、そうはいかないときもあるかも知れない。私は、世界各地で、そうした良心的アメリカ人の良心の苦悶みたいなものに、よくお目にかかつた。

つまり、「日本人になる」といふことは、日本人としての使命感、責任感を、私たちが背負うといふことだ。私たちは、もはや、「日本」の責任をそれぞれが分担して負つて居るのではなくて、一人がすべてについて責任をもたなくてはならなくなる。この意識は、たとえばあなたが商社員なら、そう感じなくてもすむ。大使館員でも同じだ。そういった機構のかくれみの下では、あなたはまだ齒車の一つであることができる。しかし、今もしあなたが一人で異邦人の世界にいたら、それも行きず

りの観光旅行者でなくて、日本の知性の代表者である留学生としていたら。

こういう場合、いちばん簡便で安易な方法は、自分の特殊性を押し殺して、できるかぎり平均化された日本人になることである。そして、たぶん、この平均化された日本人の眼は、たとえば平均化されたアメリカ人、あるいはアメリカを捉えようとするだろう。平均化された日本人と平均化されたアメリカ人、もしくはアメリカがうまく結びついたとき、人は、アメリカ人、アメリカを知ったという。

しかし、現実には、このプロセスはそんなにうまくは行かない。たとえば、安岡氏の場合、自分を平均化するという作業がうまくなされただろうか。彼にとって、それは無理なことではなかったのか。小宮氏の場合に比べるとはつきりする。次いで、今度は平均化された自分を、平均化された相手に合わせるという困難な作業がひかえている。小宮氏の場合はそれもうまくいった例だろうが、前記パーティで、オバチャン相手に奮戦していた大学教授氏の場合はそうではないのだろう。彼は、日本でも、こんな平均的な人間相手に喋る人間でないことを自分で意識していて、しすぎていて、それがあの不快なシニシズムとなつたのにちがいない。

4 自然と人工

安岡氏にとって、おそらく、「アメリカ」とは、それは一つの自然なのであろう。それも観念と諦念の共同作業によって捉えられた自然であつて、この点で、そのものしずかな観念論の軌跡の上で、氏はまったく日本古来の伝統の線上に立っていられるように見える。安岡氏にとって、アメリカは生きていく人間の集合体ではないのだろう。『感情旅行』のなかにもなるほど人間は出没するが、それ

よりもはるかに印象的なのは、たとえば、クリスマススの日のホテルの事務所の外の、いてついた赤いコカ・コーラの長持型の函であった。そして、その函は、安岡氏にとつて、あたかも自然物のようにそこにずっと位置していたのである。私は、ふと、村垣淡路守のことを思い出した。あの幕府の役人は和親条約批准書交換のため、なんらの予備知識もなくアメリカに派遣されて、『遣米使日記』という面白い書き物を残してくれたのだが、彼は、たとえば初めて目撃した汽車を、あたかも自然物のように捉えているのであつた。彼は汽車をパナマで見たのだが、汽車がパナマの地に、その自然同様に、そこにそうして昔から存在していたかのように、彼は見た。いや、もう一つ言えば、村垣淡路守は、日本にか、ゴ、という自然物があり、アメリカには汽、車、という自然物があると、そんなふうと考えていたのではないか。

アメリカが自然であるとき、それも、安岡氏自身が「はしがき」のなかでアメリカの「廣大」について述べていることばを借用すれば、「雨や、霧や、海のように、放つておくとわれわれが、それによつて侵されてしまいそうになる」廣大な自然であるとき、それに対する人間、それはつまり安岡氏自身であり、彼によつて代表される日本人という異邦人なのだが、彼らは無力であり、結局、彼らは「この国に同化されてしまうか、離れて外側に立つかどちらかで、その中間にすることが許されない」ということになる。つまり、「シヨウ」だとか「ミチュ」だとか呼ばれることに安住するか、しないか、どちらかであつて、その中間はない。

小宮氏も同じ立場をとる。「日本人同士ばかりで交際して」いる日本人留学生は、離れて外側に立っているもので、それはいけない。自分はアメリカのなかへ入らなければならぬ。そのためには、彼

は自ら進んで同化されようとする。こういう彼にとって、パーティで日本語を話すような日本人は、離れて外側に立っているもので、したがって、永久にアメリカを知るものではない。

安岡氏と小宮氏の共通点は明らかであろう。小宮氏にとつても、アメリカは自然なのかも知れない。自然ということばが悪ければ、すべすべととらえどころがない、平板な人工だと言つてもよい。

そして、たしかにアメリカはそうかも知れないのだ。すくなくとも、観念のなかで平均化されたアメリカは。

安岡氏のまえに、アメリカという広大な自然は一個の巨大な壁として立つ。その壁に入り込むためには、微細な割れ目を見つけて、辛うじてそこから身を入れて行くよりしかない。安岡氏が、たとえばあれほどの少ない交友関係から、ある程度アメリカの本質をつかんでいるのはさすがだが、ただその小さな割れ目のサイズに寸法を合わせるために、自分を小さくする。卑下してみせる。いや、これはべつに犠牲的行為でないかも知れない。彼にとつて、劣等感や割れ目を通り抜けるとき、彼の体をやわらかく包むホータイのようなものであるのかも知れない。アメリカと自分とのあいだに、彼は劣等感という緩衝物をおく。それによつて、彼は、アメリカがたとえ広大、強大な自然であつても、その重圧をまともに受けなくてすむ。だから、外からはどんなに傷ましいものに見えようと、彼の肌は案外無傷に残されているのではないか。これは受け身の安岡氏の生得の処世術なのか。それとも、日本人の天性なのか。

小宮氏は、壁の割れ目に身を入れる代り、そのすべすべとした平板な表面に、自分を密着させようとする。そのためには、自分もまた、すべすべとした平板な表面をもつ必要がある——と、まあ彼は

こんなふうに考えるのだろうか。彼の、安岡氏とはちがったまっすぐな育ちが、それを可能にする。

同化されるか、離れて外側に立つか——しかし、どこかに、中間の道はないものか。たとえば、私はこう思う。自分をなめらかな平均的な日本人に仕立てあげることの代りに、生地のままのギザギザ・凸凹の表面をアメリカという壁にぶつつけて行ったとき、その壁もまたギザギザ・凸凹の表面を次第に現わして、アメリカのギザギザと自分のギザギザとが強引に組み合わさって、すべすべした表面との接触とは、比較にならないほどの強力な結合を生み出すのではないかと。私は、自分の、また、私がこれからくわしく述べて行こうとする、私の仲間だったフルブライト留学生たちのあるものささやかな体験から、そんなふうに思う。

そして、さっきの安岡氏の二者択一のことばは、文学的表現としての美しさしか、現実には、もたないのではないか。すくなくとも、私にとって、またたぶん私の仲間たちにとっては——私たちは単純に同化されるにはあまりに成熟していたし、また完全に離れて外に立つほど私たちの精神は殻をかぶつてはいなかったのだろう。こう言いなおしてもよい。私たちもまた、阿川氏の宣言するように「小日本」をもつていたかも知れないが、それは、氏の場合のように、自分の「室」というかたちではなかった。私たちの室には、象徴的に言えば、そして実際にも多くの場合そうだったが、室にはアメリカ人の同居者がいて、寝起きを共にしていた。つまり、自分の「室」のなかにも、「アメリカ」はあった。そうすると、自分の「小日本」をかたちづくるのは、「室」などという外的な事物ではなくて、自分の心しかないが、その心は強固に「小日本」を彼の体内に形成しながら、それでいて固い殻をかぶっているのではなくて、外界の刺戟に健康に反応するほど十分に若いのだ。

シンドイ話だ。ここには劣等感という緩衝物もなければ、すべすべとなめらかな表面もない。すべ
ては、生地のままの自分でぶつかるほかはない。重圧もまともに受け、あらあらしい壁の肌ざわりも
感じなくてはならない。しかし、ひよつとすると、これは途方もなく実り多いことではないか。

5 「日本の縮図」

とは言っても、私の仲間が、すべて、そうしたことを考えていたわけでも、実行して来たわけでも
ない。いろんな人がいた。あとで述べるように、いくつかの共通項を除けば、私の仲間は、あれば、
まるで「日本の縮図」であった。さまざまの人がいて、さまざまのことを考え、さまざまにアメリカ
で生きた。小宮氏のように考え、その通りに生活した人もあれば、逆に、安岡氏のように、多くのこ
とに腹を立てていた人もいた。しかし、同時に、アメリカ、そして西洋理解の新しい芽が、彼らのな
かに芽生えて来ていたのではなかったのか。たとえば私自身のなかにも。

私は、そこに出発点をおいて、「わがフルブライトの仲間たち」のことを書いて行こうと思う。そ
れは多くの問題を、必然的にふくむことになる。たとえば、彼らはたしかに一つの「日本の縮図」
なのだが、その「縮図」がアメリカという広大な自然と文明のなかに、どのように拡がって行ったか。
彼らは拡がり、そしてアメリカでの生活を体験することによって、「アメリカの縮図」を心のなかに
かたちづくったのだが、それをたずさえて日本へ帰って来たあと、その「アメリカの縮図」は、ふた
たび日本各地へ散らばり帰って行った彼らによって、どんなふうにも日本の社会のなかにもたらされ
て行ったのか。そのとき、いつたい、何が起ったか。また起らなかったか——私はそういつたことを、

できるかぎりくわしく見て行きたいと思う。

ひよつとすると、新しいタイプの「アメリカ論」と「日本論」が、そこから生まれ出てくれるのではないかと、期待しながら。

私は、一九五八年七月初め、当時はまだ動いていた氷川丸で、他のフルブライト留学生たちとともに、横浜からシアトルへ向けてたつた。総勢二十人余。うち、女性三人。

航海は、ホノルル、バンクーバー経由で三週間もかかった。三等(A)クラス。せまい室に三人から五人ずつ押し込まれ、食事に全員が顔を合わせるほかに、しょっちゅう会合を開いていたから、親しくなるのに時間はかからなかった。

あんなにも長い間、日本のいろいろなところ、分野から出て来た人たちと、いわば「合宿」したのには、私には生まれて初めての経験であった。いや、これは、他のすべての人にとつて、同じだったろう。たとえば銀行員や技師や経済学者は、これまで、こりんざい、小説を書くという男などと鼻つき合わせて暮したことはないのだ。そして、これは学生の合宿ではなかった。大人の集まりであった。職業も趣味も性向も年齢も、すべて違う大人の集団。この本質的にてんでんばらばらの集団を一つにまとめあげているものは、「アメリカ留学」という共通の課題だった。

まったくいろいろな人がいたものである。アトランダムに表をつくってみよう。

北海道の炭鉱技師、高校の女教師、大学助教。東京の大蔵省のお役人、大学助手（微生物）、大電機メーカーの技師、女新聞記者、日本銀行員、合成繊維の大企業の技師、電電公社の事務屋さん。

名古屋の大学助手（自動制御）、市役所吏員。大阪のお嬢さん経済学者、会社員、英字新聞の記者。新潟の大学助教授（アメリカ文学）。広島の数専攻の大学院学生。下関かどこかの家庭裁判所の判事さん。山口県片田舎の中学校の英語教師。福岡の民間放送の課長さん。……いや、もう少しで、重要な人物を忘れるところであつた。東京の、ギリシア語を専攻する（と称する）小説を書くわけの判らない男。つまり、私。

右の表で即座に二つのことが判る。まず出身地が北海道から九州まで、日本全国にわたっていること。これによつて、「わがフルブライトの仲間たち」は、「日本の縮図」を地理的にかたちづくる。

次いで、職業、専攻、経歴が雑多なこと。これは出身大学が雑多なこととあいまって、社会的に「日本の縮図」をつくる。つまり、これら二つのことによつて、彼らと知り合い、つき合つたことが、私に日本を知る一つの機会をあたえてくれたのである。

そして、なお面白いことに、これらの二十余人は、アメリカで一個所にかたまつていたのではむろなく、アメリカ各地に各自の留学先をもつていた。またアトランダムに並べてみよう。

マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学、ボストン大学、エール大学、ニューヨーク大学、コロンビア大学、プリンストン大学、ペンシルベニア大学、アメリカ大学、シラキュース大学（以上、東部）。バージニア大学（南部）。ミシガン大学、イリノイ大学、オハイオ州立大学、ウイスコンシン大学（中西部）。カリフォルニア大学、スタンフォード大学（西部）。……

地理的分布は明らかであろう。あるものは伝統的なニュー・イングランドに、あるものは国際的・開放的なニューヨーク市に、あるものはもつともアメリカ的な中西部の田舎のまっただなかに、また

あるものは人種差別の南部に——といったふうには。

そしてまた、小さな大学もあれば大きな大学もあり、明日のアメリカを背負うエリートが行く大学もあれば、ボンクラ学生のデイト及びフットボール大学もあった。白人しか断乎として入学できぬ南部の名門バージニア大学もあれば、ユダヤ人の多く通学するニューヨーク大学のような大学もあった。あるいはまた、専攻によつて、それぞれの触れるアメリカは、異なつていたかも知れない。ある分野ではアメリカは神のごとくそびえ、他の分野ではそうではない——そういった例は、枚挙にいとまがないであろう。いろいろなアメリカ観、ひいては日本観がそこに生まれて来ているのにちがいない。たしかに、こうしたさまざまな立場は、総合すれば、「アメリカ」という巨大なしろものを捉えるのにもつとも好都合な立場ではないのか。観念的に考え出された、すべすべした表面をもつ平均的な「アメリカ」ではなくて、ギザギザ・凸凹をそのままに残した「アメリカ」を捉えるためには……

少しばかり、歴史的なこと、補足的なことを書いておこう。

「フルブライト留学生」の制度は、一九五一年に始まり、開始以来すでに十年以上を経ている。（「フルブライト留学生」の前身として、ガリオア資金による留学生制度があり、三年間で、四百人という大人数をアメリカに送った。これは、「フルブライト留学生」の制度とは、まったくべつの法律、条約によつてゐる。）

フルブライトというのは、この制度の創始者である上院議員の名前であるが、彼はまったく頭のよい男だ。戦争が終つてみるとアメリカの物品が世界各地に残つてゐた。そいつを売つて、あるいは売

りつけて、それでもつて「カルチュラル・エクスチェンジ」の資金にする。ついでに余剰農産物のほけ口まで便乗させて、もつともこれも「文化交流」のほうが便乗したのかも知れないが、とにかくそうしてかき集めたお金でもつて、アメリカを知ってもらおう、という。まったく、フルブライトというオヤジは、心にくいことを考え出したものである。この先生の頭の働きと努力によつて、日本ばかりでなく、ヨーロッパ、アジア、アフリカから、毎年、多くの留学生がアメリカさしてやつて来ることになった。（この留学生制度の一つのとりえは、アメリカ以外の他国の人間とも知己になれることだ。私は彼らを通して、たとえばヨルダンの政情、アルジェリアの原住民の動向など、なまなましい情報を得ることができた。第一、考えてみると、インドで餓死寸前の私が露命をつなぐことができたのも、それは、ひとえに、インドの「わがフルブライトの仲間たち」のおかげであつた。）

しかし、フルブライト氏の資金は、これは各国通貨による（日本の場合は、むろん、円）旅費支給だけをなすものであつて、アメリカでの生活費、学費はそこからは出ない。それは「スミス・マント法」とか称する法律によるものであつて、アメリカ国民の税金から支払われる。私たちは、フルブライト氏のほうのとこれとがくつついたものの留学生であつた。それが通称「フルブライト留学生」と呼ばれるものだが、くわしくは、「フルブライト・スミス・マント法全額支給大学院留学生」

このほかに、旅費だけの支給を受ける広義の「フルブライト留学生」がある。全額支給が毎年わずかに二十五名足らずというわずかな人数であるのに対し、旅費組は毎年二百人にも達する。彼らはいたいが、アメリカの大学から個人的な奨学資金をもらうことになつていて、アメリカではそれで生活するのだ。

「フルブライト留学生」の制度には、「大学院留学生」のほかにもいろんなカテゴリーがある。たとえば「教授・研究員留学生」（つまり、もうちょっとえらい人を対象にする）、「芸術留学生」「看護婦の留学生」……くわしいことは、東京のフルブライト委員会なり、各地のアメリカ文化センターに問い合わせていただきたい。私は、ここで、べつにフルブライト氏の制度の宣伝をするつもりはないのである。

いろんなカテゴリーのなかで、もつとも人気があるのは、前記「全額支給」の大学院留学生である。毎年二十五名足らずを選ぶのに、私の受験した年の例で言うと、二千人余という幻想的な数字がつめかけた。

このうちから、筆記試験と面接によって、二十五名足らずを選び出すのだが、アメリカという国はがんらい中央集権を嫌う国である。日本の県を州と同じもののように考えていたのかも知れない。試験地は北海道から九州まで七、八カ所に分散して、そのおのおのが、比例配分か何かにしたがった数字を、合格者として弾き出すのである。それによって、みごとに「日本の縮図」ができてくることは、すでに書いた。

もつとも大人数がつめかけたのは、もちろん、東京の試験場であった。あれほどの数の人間がアメリカへ行きたいのであるか。ある大学の大きな講堂で午前と午後の二回に分けて、筆記試験は行なわれた。その後、筆記試験合格者を対象とした面接二回。そのあとの書類審査。結局、残ったのは、十五、六人であった。

面接では英語を話さなくてはならない。かいく英語の話せなかつた私の場合、珍答の続出でこ

れはまったく標準にならないが、概して言えば、フルブライト留学生の英語は、こと会話に関するかぎり、あんまりすばらしいものではない。ガリオア留学生の時代、ただ英語を喋れるというだけで、それ以外になんのとりえもない連中を送り出したということもあつて、選ぶ側の基準は、会話よりも人物の内容の上にあるようだった。実際、「わがフルブライトの仲間たち」の英語は、発音の点にかけて典型的な「ジャパニーズ・イングリッシュ」であつたが、それにしても、彼らは、自分の専攻について、はたまた核実験の問題について、とにかく自分の意見を述べる事ができたのである。

年齢は二十三歳ぐらいを最年少として（大学卒業一年以上というのが、受験資格である）、最高三十五歳に至る。年齢分布も、ほぼまんべんなくその間に行きわたつていた。いちばん多いのが、二十五、六歳から三十歳に至るまでのあいだ。このあいだの年齢が、おそらく、留学に最適な年齢ではないか。異国の社会に自分を見失つてしまうほど若すぎもせず、と言つて、まだ動脈硬化を、彼の精神は来たしてはいない。

もう一つ、「フルブライト留学生」を論じるとき、見落してならないことを書いておこう。それは実務についている人たちがたいへんに多いことである。選ぶ側は、具体的な業績と、留学が彼らの将来に確実に結びつくという保証を求めていたから、これは必然的な帰結であるのかも知れない。あるいは、ここに、アメリカ流のプラグマティズムが跡を残していると考えられることでもできるだろう。ともあれ、会社員の留学生には、大学の研究者に見られない、ある視野の広さがあつた。

客観的に言つて、一応は前途有為な若者の集団であつた。そして、この「一応は」ということばがはずせるかどうかは、実際の彼らの前途にかかつているのだろう。すくなくとも、そうしたことを考

えるほどの期待を、私は彼らの未来にかけているのである。あるいは、人あつて私にたずねるかも知れない。おまえも、その一応は前途有為組の一人であつたのか、と。私はアメリカで、よくこんなふうにはアメリカ人に言った。「ホメーロスだつて居眠りするよ。わがフルブライト氏も、私が試験を受けたときは、牧羊神の白昼夢にでもふけていたのだろう」

6 ラーメンについて

前記の安岡氏の書物には、「先月末、アメリカに着いて三日目だつたが、M紙の特派員Y氏につれられて行つた店で、ミソ汁を一口すすつた瞬間、私は嘘もかくしもなく、全身から一時にシコリが脱けて行くのを感じた。まるで毛穴が全部ひらいて、そこから自由な空気がいっぺんに流通しはじめた。それを感じた」云々の記述がある。それを讀んだとき、私の頭に一つの記憶が自動的に浮かんで来た。ニュー・イングランドの田舎から、ニューヨークにはじめて出て来た日の夜の記憶である。私は二人の「わがフルブライトの仲間たち」と連れだつて、チャイナ・タウンめぐりして、あてずっぽうにバスにのつたり歩いたりしていた。二人の仲間のうちの一人は、お嬢さん新聞記者。はためには、美人の彼女を囲んで、ゴージャスな晩餐でもとりに行くことと見えたことだろう。

しかし、私たちのめぐっていたのは、ゴージャスな晩餐ではなかつた。数日前から、お嬢さん新聞記者が「ああ食べたいな」とくり返し語り、私と他の一人もまったく同感の意を表明していたのは、それはラーメンであつた。

やつとこき、チャイナ・タウンにたどり着き、適当な安レストランを見つけてもぐり込んだあとでも、

しかし、ラーメンにありつくのには、ずいぶん時間がかかった。「ラーメン」ということばは、あれはいつたい何語であるのか。「ヌードウル・イン・スープ」などと言っているうちに、やっとそれらしいものが来た。汁をすすってみたら、あの日本のラーメンの汁のごときショウ油の煮出し汁みたいなものではない。えらく淡泊な味がする。やにわにお嬢さん新聞記者は、卓上のショウ油瓶をつかんで、ドブドブと茶色の液体をスープに注ぎ入れ、一口すすってみて、それから、まったく満足しきつたように微笑した。あれはすばらしい微笑であった。この微笑を見るためなら、わが全資産をラーメンに投じてもよいと思つたくらいである。

またばかげたことを長々と書くと、言わないでいただきたい。このラーメンのことが、「わがフルブライトの仲間たち」の一つの性格をよく表わしているように思われるのだ。

まず、何故、われわれ三人がラーメンの代りに、ミソ汁を求めなかつたのか。チャイナ・タウンに出かけて、苦心してラーメンなどというそれこそ国籍不明のものをパクつく代りに、日本料理屋へ出かけて、ミソ汁をのんだつてよかつたのではないか。

第二に、同じ中国料理でも、まともなものではなくて、何故、ラーメンなどが食べたくなつたのか。第一の質問には、日本の雑種文化、そのなかで育つて来たのが、われわれだというふうに答えることができるだろう。

第二の質問には、「わがフルブライトの仲間たち」が、すべて、ラーメンになれそめることいや深き庶民の位置、いわばインテリ庶民のそれに位置している連中であつたと答えよう。そして、この二つのことは案外に必要なことなのだろう。外国を見るといふことは、結局、自分の身とひきくらべて

見るといふことなのだから。それを忘れないで、話を進めて行こう。

7 《自分を売り込め》

少しばかりばかげた比喩をつかって言えば、「わがフルブライトの仲間たち」は、ラーメンというもつともベイシックな連帯をもっていた。そして、その基本的連帯の上に、彼らは、「アメリカ留学」という共通項をうちたてる。しかし、留学実現のまえに、彼らはまず「志願」しなければならぬ。

今ではどうなっているか知らないが、私が受験したときは、筆記試験には、簡単なハガキを一枚送ればよかった。ドサリと本格的な志願書が手もとにとどいたのは、筆記試験合格の通知と同じだった。いろんな書類があり、それを一つ一つ読んで行くうちに、あるところまで来て、私の視線は動かなくなった。ほとんどギクリとした、と言ってもよい。

そこは、自分のこれまでやって来たこと、これからやりたいことなどを書かせるなんでもない個所だった。いや、いま私はうつかり「なんでもない」と書いたが、これだつて、日本のこの種の願書には皆無であることにちがいない。箇条書きに経歴を並べたてさせたり、ごく形式的にこれからの抱負などを語らせたりするのはあるかも知れないが、あんなふうに大きなスペースを空けて、いわば作文させたりする願書には、日本ではあまりお目にかかったことがない。そして、これはあとで、アメリカの大学入学志願書を見たとき判ったことなのだが、どこの大学の願書にもこの欄があつて、そして、それは、合格者を選び出す基準の上で、たいへん重大な欄であつた。

もつとも私をギクリとさせたのは、その作文欄の存在それ自体ではなかつた。私はむしろその存在

をあたりまえのこととして感じながら、ひよいと、説明の個所に眼をやった。何が書いてあったかあらかた忘れてしまったが、ただ最後に、できるだけうまく《自分を売り込め》(Sell Yourself)とあったのだけ、いまだに昨日のことにように記憶している。それが私をギリりとさせた。

そうした英語の文句があることは、私は以前から知ってはいた。しかし、これはフルブライト留学生の公式の願書ではないか。公的な文書といったようなものどまんなか、《自分を売り込め》。今から考えてみると、なんでもないことだった。アメリカでは、大学入学志願書の注意書にも、よくこの表現が用いられているのだから。しかし、そのとき、私は、大げさに言えば、眼のウロコが一枚落ちたような気がした。私は心のなかで自分にはつきりと言った。「これがアメリカなんだな」

《自分を売り込む》以上は、自分という商品に自信がなくてはならない。競争にかち残るだけの自信。それともう一つ、いったん自分を売り込んだ以上は、すくなくとも自分の効能を自分が述べたてた範囲内では、自分に責任をもたなくてはならないだろう。私はそのことをはつきりと認めた。そして、自分がいま「志願」しているのだということを、今さらのように明瞭に認識したのであるが、私の対象となったアメリカの社会というものは、たとえば安岡氏が『アメリカ感情旅行』のなかで、彼自身をふくめて次のように描き出してくれる日本の社会とは、その点で、どんなに違っていることか。

「奇妙なことだが、こんどロックフェラー財団の留学生として渡米することについて、私は自分自身でそれをのぞんでいるという心持になることがほとんど出来なかった。誰かが私を推薦してくれ、その結果自分は一つの役目をおびさせられたのであるという気がした。だから財団当局に提出すべき書類の用紙にAPPLICATION(願書)という文字が刷りこんであるのを見たとき、狼狽とも

逡巡ともつかぬ一種の当惑をおぼえた。……しかし『志願』という言葉で自分の行為を律する習慣は、われわれにはあまりナジミがないのではなからうか。私自身について言えば日常茶飯のたいいのことは心ならずもやっている。……これは私が責任感に欠けた男だからだろうか、それともこれまで責任をとろうにも責任のとりようのない社会に生きてきたからだろうか。どっちにしても私は、APPLICATIONの用紙をつきつけられると、もはや言いのがれのすべもない立場にたたされてしまった。そして、いまやパン・アメリカン機に乗りこんだおかげで、この『心ならずも』の世界から決定的に訣別しなくてはならなくなった」

私はまたもや、安岡氏とのあいだに、大きな、ほとんど決定的と言っているほどの距離を感じる。私もまた《責任をとろうにも責任のとりようのない社会》(安岡氏はどんな意味で、このことばを使っているのか。彼のぞくする小説家仲間の社会。それとも日本。それとも両者。私は日本の意味で用いる)を出て行くこうとするのであったが、それは、すくなくとも「心ならずも」ではなかった。私ばかりではなく、他の「わがフルブライトの仲間たち」の場合も同じだろう。いわば、私と彼らには、《自分売り込め》というアメリカ的思想を、自分のものとして受けとめるだけの下地があったのではないのか。

安岡氏はつづけて書く。「今後、私には一切の言い訳も弁明も許されない。茶碗を割って『すみません』と言ったら、たちどころにそれを弁償する義務を負わされる。人と会う約束をしたら一分一秒おくれるわけには行かぬ。……私の周囲には無数の、ありとあらゆる有形無形の義務感やら責任感やらが、一時にどつと押しよせて身の置きどころもないほどだ」

責任をもつということは、こうしたことをさすのだろうか。これは、この普遍的にありとあらゆることにあまねく責任をもつということは、ひよつとすると、無責任の典型ではないのか。いつたい、安岡氏は誰に対して、また何について、具体的に責任をとると言明したのであるか。私が《自分を売り込め》ということばにショックを受けたのは、自分の商品価値を明確に限定し、その範囲内で自分で自分に責任をとるという、ことばの背後の思想にであった。それが、アメリカの、ひいては西洋の根本思想ではないのか。責任の無責任な普遍拡大、無責任な無限定。私はそれを何よりも避けなければならぬと思った。もしアメリカから、西洋から真に何ものかを学びたいのなら、それが何よりも必要なことなのだから。

そのせいだろうか、私には安岡氏のように、簡単に「日本人になる」ことはできなかった。彼はすでにアメリカに着くまえ、パン・アメリカンの飛行機のなかで、日本人になつてしまつた。ことばをかえて言えば、一人の人間である自分が責任をとる代りに、一人の日本人が責任をとり始めたのだから。日本人としての責任感、義務感、これらは美しいことからであるかも知れない。しかし、同時に、人はそこに容易に逃げ込むことができるのだ。私はそれを避けたい、避けなければならぬと思つた。そのせいだろうか、私はすぐには日本人にはならなかつた。いや、なれなかつた。私も結局は日本人になつたのだが、それはきわめて緩慢に、眼に見えないところで、徐々にそうなつて行つたのだつた。

（『中央公論』 1962年5月号）

わがフルブライトの仲間たち(ii)

——「まっすぐなアメリカ」と「斜めのアメリカ」——

1 「誇張」を強いるもの

『朝日新聞』の「論壇時評」のなかで、都留重人氏は、前章の私の文章にふれて、次のように書かれている。「……『わがフルブライトの仲間たち』は、これからも続く連載ものらしいが、一種のアメリカ論ではあるものの、率直に言って私には時代の隔たりを思わせる。私のばあい、アメリカを知ったのは、そこで学問をしたときの副産物としてであったが、今ではプラス・マイナスいずれであれ、強い自意識をもつて対象に接するのであるらしい。そのためか、いろんなことが誇張されているように思う」

興味ぶかいことばである。読んでいるうちに、氏の著書『アメリカ遊学記』（1950年 岩波書店）のことが自然に頭に浮かんで来た。その短いことばの背後にも、一九三一年から四二年にいたる氏の長い留学生活の体験が、それをうらうちするものとしてあるのだろう。氏のアメリカ体験は、前に触れた安岡章太郎氏や小宮隆太郎氏のそれとは、おそらく根本的なところで、ちがっていた。対照的だった、と言つてよい。一方が義務感・責任感の重荷に喘いでいるとしたら、他方はもつと自然であったりまえてこだわりのないものであった。『遊学記』は読んでいたのしかつた。抵抗感なしにすらすらと読めた。ことに、安岡氏・小宮氏のザンゲ録、あるいは信仰表白のような重苦しく傷ましい書物に

うなされたあとでは、ひとときわ誦後感はさわやかであった。一口に言つて、都留氏の体験は「プラス・マイナスいずれであれ、強い自意識をもつて対象に接する」ことからむりやりにひねり出されたものではない——それが気持よかつた。そこにはさわやかな微風が吹いていた。

第一、都留氏は、学者の小宮氏はさておくとしても、安岡氏や私のように、アメリカを「見る」ためや「知る」ために出かけたのではないのだ。彼は学問するために行つた。それも、日本で大学教育を受けることができなくなつたので、仕方なしに出かけた。目的地は、べつにアメリカでなくてもよかつた。彼自身が『遊学記』のなかではつきり書いてるように、ドイツへ行くまえのほんの腰かけのつもりで太平洋を渡つた。だから、たしかに、彼がアメリカを知つたのは、それはそこで「学問をしたときの副産物として」であつたのだろう。そうあり得たと言つてもよい。私は氏がそんなふうに言い切ることができるとを了解したが、同時に、あるもどかしさを、そのことばの底に感じていた。

どう言つたらいいか。そのあるもどかしさというのは、『アメリカ遊学記』ぜんたい、つまり、たぶん都留氏のアメリカ体験そのものに、私を感じたもどかしさと同じだつた。『遊学記』は、實際、気持のよい本であつた。氏のアメリカ体験は、さわやかなものであつた。アメリカの事物に対するこだわりのない自然な態度——私はそこに深い共感を覚えた。それは、私自身もそうしたものをもち、そのうえに、私自身のアメリカ体験をうちたてていたからであらう。私と若き日の彼は、そこで、いわば同じ所に立つ。

つづきは製品版でお読みください。